

台風・風水害

◆台風に備えて

台風の仕組みを知っておくことは、被害を少なくするために重要です。

1 台風とは

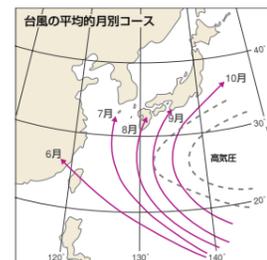
熱帯の海上で発生する低気圧を「熱帯低気圧」と呼び、このうち北西太平洋で発達して中心付近の最大風速がおよそ17m/s(風力8)以上になったものを「台風」と呼びます。

気象災害の中で最も大きな被害をもたらすのが、この台風です。平均的な台風のエネルギーは、広島・長崎に投下された原子爆弾の10万個分に相当するといわれています。

台風災害は猛烈な風と大雨に襲われることが多いので、避難や防災・救援活動に大変な困難を伴います。ただし、地震と異なり進路や規模をある程度予測できるので、被害を最小限度に食い止めることは可能です。

2 台風の経路

台風の経路は、時期によって違います。8月末から9月に日本列島に接近する台風は、低緯度では西へ進み、地球の自転の影響を受けながら北へ進みます。北上するにつれ偏西風(強い西向きの風)に流されて東へ進みます。日本列島の西方に達すると、太平洋高気圧の縁に沿って速度を上げ、放物線を描くように日本列島に接近します。このとき、秋雨前線に南からの湿った空気が吹き込み、大雨をもたらします。



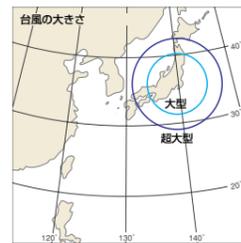
一方、台風の大きさは「強風域」(毎秒15m以上の風が吹いている範囲)の大小で決められます。つまり、「強い台風」では中心付近で大きな被害が予想され、「大きな台風」では広い範囲に台風の影響が及ぶことが考えられます。

3 台風の大きさと強さ

強さ	最大風速	大きさ	風速15m/s以上の半径
強い	33m/s以上～44m/s未満	大型(大きい)	500km以上～800km未満
非常に強い	44m/s以上～54m/s未満	超大型(非常に大きい)	800km以上
猛烈な	54m/s以上		

大気の流れは、気圧の高い所から低い所へ向かいます。台風は中心付近の気圧が極端に低いため、周りから猛烈な勢いで大気が吹き込みます。吹き込む風は地球の自転を受けて左巻きとなり、こうしてできる巨大な空気の渦が台風です。このとき周囲の気圧との差が大きいほどより強い風が流れ込み、したがって一般的には、中心部の気圧(ヘクトパスカルで表される数値)が小さいほど台風は強力であるといえます。

一方、台風の大きさは「強風域」(毎秒15m以上の風が吹いている範囲)の大小で決められます。つまり、「強い台風」では中心付近で大きな被害が予想され、「大きな台風」では広い範囲に台風の影響が及ぶことが考えられます。



4 風の強さと吹き方

平均風速(m/秒)	時速	予報用語	人への影響	樹木の様子	建造物の被害
10以上15未満	～50km	やや強い風	風に向かって歩きにくくなる。傘がさせない	樹木全体が揺れる。電線が鳴る	取り付けの不完全な看板やトタン板が飛び始める
15以上20未満	～70km	強い風	風に向かって歩けない。転倒する人も出る	小枝が折れる	ビニールハウスが壊れ始める
20以上25未満	～90km	非常に強い風(暴風)	しっかりと身体を確保しないと転倒する		鋼製シャッターが壊れ始める。風で飛ばされた物で窓ガラスが割れる
25以上30未満	～110km		立ってられない。屋外での行動は危険	樹木が根こそぎ倒れはじめる	ブロック塀が壊れ、取り付けの不完全な屋外外装材がはがれ、飛び始める
30以上	110km～	猛烈な風			屋根が飛ばされたり、木造住宅の全壊が始まる

◆風水害に備えて

台風が近づいてくるとわかったら、事前にできるだけの備えをしておきましょう。

1 家の内外の風水害対策

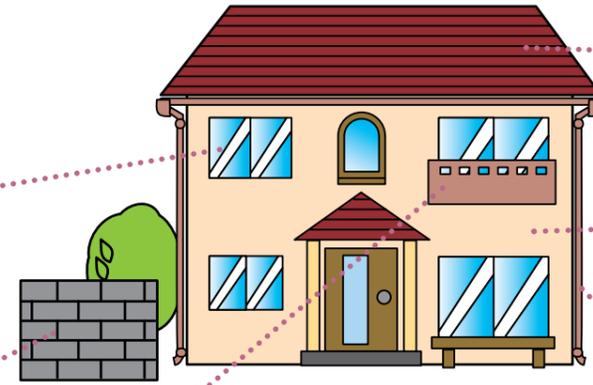
① 屋外での対策

◇窓ガラス

ひび割れ、窓枠のガタツキはないか。また強風による飛来物などに備えて、外側から板でふさぐなどの処置を。

◇ブロック塀

ひび割れや破損箇所はないか確認。



◇屋根

瓦のひび、割れ、すれ、はがれはないか。トタンのめくれ、はがれはないか。

◇外壁

モルタルの壁に亀裂はないか。板壁に腐りや浮きはないか。プロパンガスのボンベは固定されているか。

◇雨どい・雨戸

雨どいに落ち葉や土砂が詰まっていないか。継ぎ目のはずれや塗装のはがれ、腐りはないか。雨戸にガタツキやゆるみはないか。

◇ベランダ

鉢植えや物干し竿など、飛散の危険が高いものは室内へ。

◇側溝

側溝のゴミや土砂を取り除き、雨水の排水をよくしておく。

② 屋内での対策

懐中電灯、携帯ラジオ、貴重品などの非常持出品を準備する。

テレビなどの気象情報を、注意深く聞く。

危険なので、むやみに外出しない。

断水に備えて、飲料水を確保する。

浸水の恐れがある場所では、家財道具や生活用品を高い所へ移動。

子どもやお年寄り、病人などを安全な場所へ避難させる。



2 洪水になったらこうして避難



素足や歩きにくい長靴はダメ。ひもで締められる運動靴タイプのものがよい。



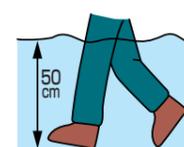
水底の危険物には要注意。破片類だけでなく、石などに思い切り体重をかけるとネンザする場合も。



はぐれないように互いの身体をロープで結んで避難する。水深が浅ければ子どもを歩かせてもいいが、絶対に目を離さない。



子どもやお年寄りには浮き輪が役立つ。ただし、深い所では流されるおそれがあるので、使用を避ける。



歩ける深さは約50cmが限度。水深が腰までであるようなら、無理をしないで高いところで救援を待つ。



赤ちゃんには、ベビーバスでの移動も便利。ただし、絶対に目を離してはいけない。

